



# まるで15年前の四万十川

## アユの生態調査

# 北川は全国トップクラス

29.11.19  
夕刊デイリー

## 専門家 高い評価 天然産卵場に卵びっしり

高橋勇夫さん



延岡市北川町を流れる北川に生息するアユを守ろうと同町の北川漁業協同組合(長瀬二二組合長)は14日、全国各地でアユの生態について調査している高橋勇夫さん(55)にたかはし河川生物調査事務所を招いて、河川とアユの視察を行った。高橋さんは「15年前の四万十川を見ているよう。全国でもトップクラスの河川」と高く評価した。

高橋さんは、長崎大学水産学部卒業の農学博士。昭和56年から西日本科学技術研究所で水生生物の調査とアユの生態研

究に従事。平成15年にたかはし河川生物調査事務所を設立した。現在、全国各地の河川で天然アユを増やす活動に取り組んでいる。

高橋さんによると、川の良しあしは川底を見れば分かるという。砂や泥で固められた状態では、アユが産卵できない。北川は石と石の間に隙間が

あり、浮き石状態が好ましく、かなりの状態と高く評価した。天然の産卵場について「100点満点で評価すると、全国的には無い所で5、30点、平均が40、50点のなか、北川は80点はある。卵がびっしりついている。全国で5本の指に入るほど。こちらが勉強になった」と驚いていた。

さらに「最も大切なことは漁協や一部の人たちだけでなく地域住民が素晴らしい財産があるという自覚すること。ぜひ、皆さんで守ってほしい」と要望した。



高橋さん(左)からアユの産卵の説明を受ける参加者

視察には、北川漁協と東海漁業協同組合(内田裕之組合長)、五ヶ瀬漁業組合(柳田昌則組合長)の組合員、あゆの渡辺延岡淡水養魚場の後藤慎治場長らが参加。天然の産卵場6カ所と、今月初旬に北川、東海漁協が重機を使って整備した産卵場を調査した。

高橋さんは、ドライスーツを着用して川に潜り、アユの数やサイズ、産卵の有無、川底の状態

長瀬組合長は「専門家から褒めてもらえてうれしく思うが、私は、もっときれいでアユがたくさんいた北川を知っている。川の状態を維持するのははなから、年々きれいになるよう努力を続けていきたい」と話した。

一方で漁協が整備した産卵場では「造成方法は良く、きれいに仕上げている」と評価したが「産卵した形跡はあまりない。産卵と整備のタイミングが合っていないのかもしれない」と指摘した。

その上で、今後の課題として「産卵場の人工的な整備よりも、天然の産卵場の禁漁期間を延ばす。取りすぎないようにする。見守ることが大事」とアドバイスした。